

実践報告

札幌市立屯田北中学校

(1) 研究内容

研究課題研究課題：「性に関する学習の研究」

- 生命尊重や自己を肯定的に受け止める心、自他の心と体を大切にする生徒の育成。
- 望まない妊娠やSNS等による性的な被害を未然に防止するとともに、適切な意思決定や自己主張ができるような生徒の育成
- 性的少数者も自己を肯定し、安心して生活できる学校環境の整備と、教職員の多様性への理解の促進

(2) 実践の内容

【実践①】学年の成長過程に対応した性に関する講演会

○ねらい

1年生	「生まれてくる小さな命」「命の重さ」「喜び」を感じる。 出産に向かう親の気持ちに気づき、思春期・反抗期にある中学生に「自分もこうして育てられた」実感や「親の思い」などを知る。自分や他者の命の重さを感じる。
2年生	体や心の変化や個人差、異性に対する気持ちの男女差、性の多様性について知る。 他者を尊重すること、違いを認め合うことの大切さを考える。
3年生	人との平等な関係とはどういうことか、どのような行動が人権侵害に当たるのかを知る。 自分も相手も大切にできる人権感覚や価値観を形成する。

○学習内容

	実施時期	事前学習・資料	学習内容
1年生	1月	冬休みに①名前の由来、②出産時や子育ての苦労、③親からのメッセージをインタビューする。	「いのちの輝き～助産師からのメッセージ」というテーマで、3億分の1の確立で存在していることや愛情がなければ乳児は育たないこと、映画「うまれる」などを通して、自分や周りの人の命がかけがえのないものであることを助産師に講演していただく。事後の感想に谷川俊太郎の詩「生きる」を真似て、自分で作詩をする。
2年生	12月	パンフレット「LGBTってなんだろう？」(発行：札幌市市民文化局男女共同参画室)	助産師に「思春期のころとからだ」というテーマで性の多様性、思春期の男女のころとからだの変化や悩み、中学生らしい男女交際とは、SNSの性被害、デートDVなどについて講演していただく。
3年生	7月	パンフレット「知っていますか？デートDV」(発行：札幌市市民文化局男女共同参画室)	「体と命の大切さ～性感染症から学ぶ～」というテーマで助産師に10代の妊娠出産リスク・性感染症・妊娠中絶、デートDV、セクシュアルハラスメント等を題材にしながら、「人権とは何か」「相手を尊重する」とはどういうことかを講演していただく。健全な関係における境界線や自己主張についても考える。

【実践②】LGBTの生徒に対する理解と配慮

○ ねらい

今後、一層表面化していくことが予想される「性的違和感」をもつ生徒に対して、他校の参考となるように実践をまとめる。また、互いの個性や多様性を認め合う学校づくりのため教師の人権意識を高める取組を行う。

○ 学習内容

自分の性に対して違和感をもつ生徒に対して、教職員の理解を深め、学校がどのような配慮を行ったかについて、3年間の取組を振り返る。

外部のLGBTの研修会参加を呼び掛けるとともに、冬休み中に当事者を講師に迎え、校内研修「多様な性と性別を考える～あなたは他の誰でもない あなたの人生を生きている～」を実施し、個性や多様性を認め合う人権意識を培う。教職員に職員会議や研修部だより等で資料提供を行う。保健室前の掲示板にフラッグを飾る、職員室入口に関係書籍を置くなど、見える化を図る。

(3) 研究のまとめ

① 成果

【実践①】学年の成長課題に対応した性に関する講演会

本校では8年間題材を工夫改善してきた。中学生は1年生と3年生では性に対する興味や関心が大きく違うため、学年ごとに題材を変え、性を通して自他を尊重する学習をすることは大変効果的である。特に、1年時の「生まれてきてくれてありがとう」といった保護者からのメッセージは基本的自己肯定感が育まれるものであった。3年生の夏休み前の男女交際やデートDVの話は、時期的にタイムリーで好評である。



家の子供に産まれてきてくれて、ほんとにありがとう

初めての出産と育児で、何をやるにも心遣いと不安で、いっぱいでした。まくれせを二日入院したり骨折を二病院に通ったり色々あったけど3月で13歳。元気に大きく成長していて、ありがとう。あんな事が大好きです。

【実践②】LGBTの生徒に対する理解と配慮

性別によらない名簿の準備期間として、できるところから男女別をなくした。

制服、男女別になる授業、修学旅行の部屋や入浴、進路選択など、性別で分けられないような体制を整えた。1年早く性別によらない名簿の完全実施を行う。また、保健室前にレインボーフラッグを掲示し、相談しやすい雰囲気づくりをしている。

校内研修会では、「講師の思いや経験に触れるということがとても貴重な機会になった」「配付資料『心の基本的人権』と相反するような文化・風土が本当はないのか」「多様性と向き合うことは、ずっと考え続けること」という感想が聞かれ、欠席した教員にも研修部だよりで共有した。



② 課題

- 年3回、講師を呼ぶためには、予算が必要である。無料で助産師を派遣してくれる保健センターの思春期ヘルスケア事業は今後新規の学校のみとなり、札幌市教育委員会の産婦人科医助産師派遣事業も対象になる年とならないと年があり、教育課程に位置付けて行うことが難しい。
- 性はグラデーションであり、思春期は自分のアイデンティティも定まりにくい。柔軟に対応できる学校体制と約8%（学級に1～2人）いるLGBTの生徒に限らず誰もが過ごしやすい環境、何気ない言葉で生徒を傷つけたり、排除することがない教師の人権感覚の醸成が大切である。

③ 提言「人権教育のすすめ」

- 人権について考えることは、自分を理解し、社会について学んでいくことである。自分を大切にし、相手の立場や気持ちを理解する上でも必要な学習である。
- これからの国際社会のキーワードは、多様性を認め合う共生社会（ダイバーシティ）である。自分とは異なる相手との違いを知り、理解し、繋がっていくことで、新しい価値観が生まれ、働きやすい職場と企業が発展すると考えられている。義務教育の段階から、このような人権感覚を身に付けていくことはとても重要と考える。